

15のいす

未来に繋がる 司法の歩み

最高裁判所判事

千葉 勝美



「我々は、後ろ向きになって未来に入っていく。」(nous entrons dans l'avenir à reculons.) 学生時代に会ったフランスの詩人で思想家ポール・ヴァレリーのこの言葉の逆説的なニュアンスが、当時から解けない謎のように心の中に残っていた。その後、同じような言葉にまた出会った。

中島みゆき作の音楽劇・夜会 no.13「24時着0時発」は、過熱するバブル経済期に未来を疑わず突き進んでいった人間の営みが挫折した後、残された者達の目線で見えた不条理の世界を鮮やかに描き出している作品であるが、その中で、こんな歌詞が歌われている。「行く先表示のまばゆい灯りは列車の中から 誰にも見えない。無限軌道は真空の川 ねじれながら流れる」

近年、最高裁では、我が国社会が抱える今日的な課題がそのまま紛争・事件となり、法的解決を求めて上告される状況が見られる。超高齢化社会の到来による老人介護を巡り、介護施設で体力だけは元気な老人が起こす事故について、施設管理者等の安全配慮義務違反の有無が問われるようになり、DNA解析技術や生殖補助医療の急速な進歩が、血縁関係の証明やいわゆる代理出産等を可能にし、法律上の親子関係の成



立が争われる事態が出現しており、精神医学の進歩がPTSD(外傷後ストレス障害)など精神に与える傷害という新しい概念を明確にし、犯罪被害者や暴力的いじめで自殺した者の心理を解き明かし、その法的評価が問われるようになり、さらには、企業のグローバ

ル化した経済活動がトラブルを解決するために準拠すべきルールをどう捉えるかが論争になるなど、立法や行政の対応がされないうちに起きた紛争等が、いきなり裁判所に持ち込まれてきている。

司法は、未来を予測し、未来を創造するものではなく、未来とは逆の歴史的事実に向き合いながら、法解釈という手法で、先例のない紛争であってもその本質を見極め、在るべき解決策を模索することがその使命であり、愚直に一つ一つの事件の解決を積み上げていくことが未来に繋がるということであろう。冒頭のヴァレリーの言葉も中島みゆきの詞も、行先が見えない列車に乗って時の流れを進む今日の司法の姿を連想させる響きがある。夜会のフィナーレの冒頭に出てくるカタッ、コトッと繰り返す列車の走りを感じさせる音楽は、私にとって、日々歩み続けるための伴奏(伴走)のように聞こえてくるのである。

(ちば・かつみ)